

はじめに

揖斐郡読書感想文推進委員会委員長 宗宮 一夫

今年度も揖斐郡内の児童・生徒による読書感想文優秀作品を文集としてまとめ、刊行の運びとなりましたことを、心よりうれしく思います。夏休みという長期の休みを使って、一冊の本とじっくり向き合い、心に響いた言葉や作品から受けた感動を自分の言葉で豊かに表現したこれらの感想文の数々には、それぞれの発達段階に応じた考え方や感じ方、感性のすばらしさがはつきりと記されています。

近年、情報技術の発展に伴い、私たちの生活は大きく変化してきています。映像や音声からの情報取得が主流となる中で、読書に費やす時間が減少している傾向が見受けられます。一冊の本を手に取り、文字を追いつながらその世界に没頭するという体験は、以前にも増して貴重なものとなっています。

読書は、単なる知識の習得にとどまらず、知的好奇心を刺激し、将来を考える契機となったり、自他への理解を深め、周りとの向き合い方を学んだりできる極めて意義深い

営みです。また、作品に描かれる多様な価値観や感情に触れることで、子どもたちは想像力を養い、感受性を磨き、より豊かな人間性を育んでいきます。さらに感想を文章で表すことによって、自らの思考を整理し、他者に伝える力（表現力）も身に付きます。この力はこれからの社会を生きる上で欠かすことのできない重要な力となります。これからもたくさんのおい本と出会い、深い知識や考えを身に付け、生涯にわたり学び続けてほしいと願っています。

保護者の皆様、お子様の読書活動を見守り、応援していただきましたこと、深く感謝いたします。ご家庭での読書の習慣はお子様の成長に大きな影響を与えます。読書は一生の宝物です。今後もご家族皆で読書に親しむ時間を過ごしていただけたらと思います。本との出会いを大切に、読書を通じて心を耕し、言葉を通じて世界が広がる喜びを感じてほしいと願っています。

結びに、審査にあたりご尽力いただきました揖斐郡内各校の先生方、各校読書感想文推進委員の先生方、揖斐郡教育研修センターの皆様にお礼を申し上げます、巻頭言といたします。ありがとうございました。

令和七年度 揖斐郡読書感想文優秀作品集 目次

Ⅰ はじめに
令和七年度郡読書感想文推進委員会顧問 宗宮 一夫 校長 1

Ⅱ 目次 2

Ⅲ 令和七年度 揖斐郡読書感想文コンクール実施要項 3

Ⅳ 令和七年度 揖斐郡読書感想文 出品者数・入賞者数 4

【小学校低学年の部】

■課題図書部門

「こころのなかのたたかい」
清水小学校一年 加勢 凌真 5

■課題図書部門

「しんゆうがほしいな」
南小学校一年 三間 壮馬 6

【小学校中学年の部】

□自由図書部門

「車いす手にスプレイヤー
小田凱人さんの本をよんで」
中小学校四年 柴山 未羽 8



【小学校高学年の部】

□自由図書部門

「命の重み」
清水小学校五年 加勢 悠真 9

□自由図書部門

「ぼくの体内時計とすいみん」
小島小学校六年 林 想真 10

【中学校の部】

□自由図書部門

「命の尊さ」
池田中学校二年 竹中 咲綾 11

■課題図書部門

「今日を生きる」
谷汲中学校三年 植山 あおい 13



審査を終えて
書感想文推進委員会郡代表 白川 夏穂 教諭 15

【表紙画】 北方小学校五年 高橋 穂香

(敬称略)

令和七年度 揖斐郡読書感想文コンクール実施要項

一、名称 揖斐郡読書感想文コンクール

二、目的 学校図書館における読書指導の充実振興と児童・生徒の健全かつ豊かな心の育成と読書能力の向上に資する。

三、主催 揖斐郡教育会
揖斐郡教育研究会学校図書館部会

四、期日と会場と審査方法 地区審査：令和七年八月二十八日 町ごとに実施
各地区理事が設定した場所にて地区ごとの図書館主任が、審査委員
会を構成して行う。

郡審査：令和七年九月三日 午後一時～午後四時
揖斐郡教育研修センターにて、揖斐郡図書館部会の役員及び各地
区理事で審査委員会を構成して行う。

五、応募規定

◆用紙 原稿用紙を使用する。

◆出品作品

・自由図書の一部・・・小説、童話、民話、戯曲、詩歌、伝記、ノ
ンフィクションなど 課題図書以外

◆字数(題名、学校名、氏名は除く)

・小学校低学年・・・八百字以内
・小学校中、高学年・・・千二百字以内
・中学校・・・二千字以内

◆作品には、必ず応募票をつける。

◆各学校で部門別に応募点数を把握し、報告する。

六、審査委員

委員長・・・揖斐郡読書感想文推進委員会委員長

副委員長・・・郡読書感想文推進委員会代表

委員・・・郡読書感想文推進委員会役員、地区理事

七、審査について

(一) 審査は、小学校低・中・高学年、中学校の四部門に分け、さらに部門
別、学年別に行う。

(二) 賞の種類及び点数 (郡の応募総数が一八七点のため県規定より)
①特選(入選者の中から) ※揖斐郡の代表として県へ送付する。

八、審査の窓

① 読書の喜びや楽しみを感じることがができる。

② 読書による自己の変容を伺うことができる。

③ 学年の発達段階に応じた考え方・感じ方をしている。

④ 小学校低・中学年では、読んで楽しい作品でありたい。

⑤ 小学校高学年では、広い視野から作品を捉えたものでありたい。

⑥ 中学生は、自分の体験を土台にして批評を加えたり、共感をしたりしている
作品が望ましい。

⑦ 自分の言葉で生き生きと表現している。

⑧ 自分の意見や感想を素直に述べ、読み手によく分かる。

⑨ 図書の選択が、発達段階に適している。

⑩ 部分的でなく、作品全体の感想になっている。

⑪ 応募規定に達している。

九、その他

作品の応募に際して、十分に指導しておきたいこと

・文章の構成はよいか。

・文章のねじれはないか。

・誤字・脱字はないか。

・文字は丁寧に読みやすいか。

十、作品集

優秀作品については、「読書感想文優秀作品集」としてまとめ、郡内各小中学
校に配付するとともに揖斐郡研究センターホームページに「デジタ
ル版読書感想文優秀作品集」として掲載する。

令和7年度揖斐郡読書感想文 郡出品数・入賞者数

小 学 校		郡への出品数	特選	入選	佳作
小学校・低	自由	8	0	2	6
小学校・低	課題	12	2	2	8
	1年自由	3	0	1	2
	1年課題	6	2	0	4
	2年自由	5	0	1	4
	2年課題	6	0	2	4
小学校・中	自由	14	2	3	9
小学校・中	課題	20	0	5	15
	3年自由	8	1	2	5
	3年課題	6	0	1	5
	4年自由	6	1	1	4
	4年課題	14	0	4	10
小学校・高	自由	15	2	5	8
小学校・高	課題	11	0	3	8
	5年自由	9	1	3	5
	5年課題	3	0	1	2
	6年自由	6	1	2	3
	6年課題	8	0	2	6
小学校	自由	37	4	10	23
小学校	課題	43	2	10	31
小学校		80	6	20	54
中 学 校		郡への出品数	特選	入選	佳作
	中1自由	12	0	4	8
	中1課題	1	0	0	1
	中2自由	18	1	3	14
	中2課題	5	0	2	3
	中3自由	10	0	3	7
	中3課題	4	1	2	1
中学校	自由	40	1	10	29
中学校	課題	10	1	4	5
中学校		50	2	14	34

小学校低学年の部

特選 課題図書部門

こころのなかのたたかい

揖斐川町立清水小学校一年

加勢 凌真

ぼくは、ひとのこころのなかには、きつとみんな、いいひととわるいひとがすんでいるのだとおもう。ぼくのなかにもいるし、しゅじんこうのおるのなかにも。

とおるのこころのなかには、かわいいねこのポーとずっといっしょにいたいというきもちがあった。でも、ほんとうのかいぬしのもりくんに、かえさなければいけないというきもちもあり、いいとおるとわるいとおるがこころのなかでたたかっていたのだとおもう。さいしよは、どうしてもポーとはなれたくなかったから、もりくんにいじわるをいってしまったり、もりくんのさがしているトムがどんなねこかきこうとしなかったり、わるいとおるがいた。でも、だんだん、いいとおるがかって、このままではだめだとおもうようになっていったとおもう。さいごには、ポーのめをみて、「ポー」ではなく「トム」とよんで、もりくんにかえすことをきめた。このとき、つるつるとなみだながれてきたとかいてあったが、ポーとわかれることをきめて、かなしいきもちをのりこえようとするとおるはかっこいいとおもった。

ぼくのなかにも、いいぼくとわるいぼくがいて、いつもたたかっている。いいぼくがたたかいかたば、ほめられるし、わるいぼくがかつとおこられてしまう。わかっているけれど、なかなかむずかしい。とおるはおとなになろうとがんばったのだとおもう。ぼくもすこし、おとなへのだいいっぱいをふみだしてみようかな、とおもうようになった。



ポーがもりくんのもとかえってからあとのことはなにもかかれていない。でも、ぼくはそうぞうする。とおるくんともりくんは、だいしんゆうになって、ふたりのあいだで、トムがまんぞくげにゴロゴロとのどをならしているすがたを。ポーはおるにとつてせいちょうさせてくれるだいじなそんざいだったとおもった。

岩瀬 成子 作

『ぼくのねこポー』

PHP 研究所

【講評】

主人公の心の葛藤を「いいとおる」と「わるいとおる」が「たたかっている」と表現し、自分の中にも「いいぼく」と「わるいぼく」がいると、自分に重ねて感想を書いているところに共感もてます。物語のその後を自分なりに想像して、二人の友情を書いているところが素敵です。

小学校低学年の部

特選 課題図書部門

しんゆうがほしいな

大野町立南小学校 一年

三間 壮馬

「ぼく」はいいなあ。すごくなかよしなともだちがいて、うらやましいなとおもった。ぼくもがっこうにいけば、はなしたりあそんだりするともだちはいるけれど、こんなになかよしなともだちはいない。すごくなかよしなともだちをしんゆうというと、おにいちゃんにおしえてもらった。ぼくもしんゆうがほしい。

「ぼく」はななかまはずれにされたきがして、ダンボールをこわしてあそびにいかなかったけど、それはエトがだいすきだったからだとおもう。しんゆうをシユーにとられたきがしてかなしかったのかな。でもドンナサカモ・ヘツチャラごうでいっしょにあそんでいるうちにエトとなかなおりにして、シユーともしんゆうになった。「ぼく」にはふたりもしんゆうができた。

ぼくがいちばんよくあそぶのは、三さいのうえのおにいちゃんだとおもう。おかあさんに、「そうちゃんは一にち、ひゃっかいは、にいちゃん、にいちゃんってよんでるね。」

といわれた。たたかいごっこをしたり、トランプであそんだり、「ぼく」やエト、シユーのようにダンボールであそんだりもする。だけど、おにいちゃんがクラスのとみだちとあそぶときは、あまりあそんでくれなくなる。たまにいっしょにつれていってくれるけど、ともだちとあそぶことにむちゆうにだし、ゲームであそんでいると、なかまにはいれない。ぼくもしんゆうがほしいけど、どうやったらできるのかな。シユーはエトと「ぼく」にはなしかけていた。なかよさそうにあそんでいるこたちに、なかまにいてとこえをかけるのは、すごくゆうきのいることだとおもう。きつとシユーもしんゆうがほしかったんだね。ぼくもゆうきをだして、あしたいってみよう。「ぼくも、なかまにいて！」



リンダ・さら 作 ・ しらいすみこ 訳
『ともだち』

ひさかたチャイルド

【講評】

今は、仲のよい友達「しんゆう」はまだいないかもしれない。でも、新しい友達との関わりの中で生まれた主人公の感情に共感しながら、自分も勇気を出して友だちと関わっていきたいと考えた姿が素敵です。

小学校中学年の部

特選 自由図書部門

車いすテニスプレイヤー小田凱人さんの本を読んで

大野町立中小学校 四年

柴山 未羽

「だめだ。」もうやりたくない。むりだ。」

これらは、わたしがホルダーの練習中に言ってしまう言葉です。

わたしの夢は、スポーツクライミングのホルダーの選手としてオリンピックにでることです。そのために今、練習をがんばっています。

この本を読んだきっかけは、練習中にネガティブな言葉をいってしまおうわたしにたいして母がすすめてくれたことです。

小田さんは、九さいのときに骨のがんである病気にかかって車いすの生活になり、夢であったサッカー選手をあきらめなくてはならないじょうきようから新たに車いすテニスプレイヤーになるという夢を見つめます。

わたしとほぼ同じ年れいでもし自分は、大好きなボルダリングができなくなつて夢がかなえられなくなつたとしたら、ずっと泣いてすごしているかもしれせん。

そんななかでも入院生活を楽しんでさらに新しい夢まで見つけてしまう凱人さんはなんて強い人なんだろうと思ひました。

夢を新たに見つけてからの凱人さんは、一生けん命に練習を重ねてどんなにつらいときでもポジティブな気持ちでのりこえ

夢を一つ一つかなえていきます。

わたしは、ボルダリングがすごく楽しいけれどむずかしいかだいにちようせんしてできないときに「だめだ。」

「できない。」などくやしさをそんな言葉を言つてしまいます。そして母に

いつももつとポジティブにおきかえよう、「一手進んだ。次はできるかもしれない」といえばいいよ、といわれます。

凱人さんの本を読んでみて世界一になるといふ夢をかなえる人はやっぱりどんなときもポジティブであきらめない強い人でなくてはならないと気がつきました。

母がいつていたこともこういふことなのかなと思ひました。

自分よりも、大変な思ひやつらい思ひをしてはるはずの凱人さんがつねに前向きで次々と夢をかなえていく姿に感動して、わたしも凱人さんのように夢をかなえられるようになりたいと思ひました。

まずは、練習のときにネガティブなことをいわないように気をつけてポジティブでいることを心がけ夢をかなえられるように日々練習をがんばつていきます。

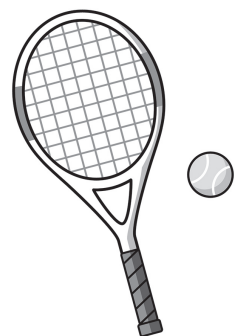
小田 凱人 作

『凱族』

ぴあ株式会社出版

【講評】

夢に向かつて努力しながらも時折ネガティブな言葉を言つてしまふ自分と、困難に立ち向かいながら世界一になる夢を叶えた小田凱人さんとを比べることで、前向きに頑張ることが大切なのだといふことに読書を通して気付くことができました。



命の重み

揖斐川町立清水小学校 五年

加勢 悠真

子犬一匹 五百円。これは、子犬をほかくして保健所に持ちこんだら、子犬の命と引きかえにもらえるお金。命にねだんがついてしまうことにおどろいたし、その金がかくがとにかく安すぎる。人間の命と動物の命、どちらの命が大切とかはない。命の重みはみな平等であり、命の重みを天びんにかけることは、決してあつてはならないことだと思う。ましてや、子犬の命とプラモデルを天びんにつけて、とまどうこともなくプラモデルを選ぶ子供たちがいるなんて信じられない。こころの底からいかりがこみあげてきた。

この本のぶ台は愛媛県の動物愛護センター。動物愛護という名前からすると、動物たちがとても大切にされていそうなのだが、実際に行われていることは動物の命をうばうこと。ここで働く職員は獣医師で、ぼくが将来目指したい職業である。獣医といえ、治りようをして動物の命を救う職業だと思つて、たが、まさか、動物の命をうばう獣医師もいたなんておどろいた。動物の命を救いたくてついた仕事だろうに、身勝手なかい主のせいで捨てられた動物の命をうばう仕事をしている職員のみなさんの心は、きつとおだやかではないだろうと思う。ボタン一つで、一度にたくさん動物の命をうばう日々、いくら仕事と割り切つても、かっとうの毎日だろうと想像する。

印象的だったのが、この本の最初にある犬たちの最期の写真だ。たくさん犬が、折り重なって命の終わりをむかえ、焼却炉で灰となる様子がうつつしだされていた。一頭一頭の命の重みが全く感



じられない、目をふさぎたくなるようないたましい写真だ。身勝手な都合で捨てた自分の犬が、このような最期をむかえていることを、かい主たちは知るべきだと強く思う。それでも犬たちの死に顔はおだやかだと書かれていたことに心がいたんだ。命がつきるそのしゅん間まで、自分のかい主がむかえにきてくれると信じているのだろうか。うら切られ、捨てられたと思つて死んでいくより、また会えると信じているほうが幸せでいられることを、犬たちは知っているのかもしれないなと思つた。

現在、うちには八匹の保護ねこがいる。これまでも何匹もの保護ねこをみてきた。ぼくのうちではペットも家族の一員なのだ。最期をむかえるしゅん間まで、たくさん愛をそそぎ、命をそん重するのがルールだ。それが動物をかう人の責任であると思う。

この本を読んで、命の重みについて改めて考えさせられた。命の重さに順位はつけられないし、比べられるものではない。かい犬、かいねこの命の重みについては、社会全体で考えていくべきだと思ふけど、まずは身近なことから。この夏、ぼくは、動物愛護センターに行つてみようと思ふ。



今西 乃子 著

金の星社

『犬たちをおくる日―この命、灰になるために生まれてきたんじゃない』

【講評】

将来の夢は、獣医師という悠真さん。動物愛護センターで行われている現実と向き合い、「命の重み」について感じたことを率直に表現している点が、読み手の心をひきつけます。生き物の命に責任をもつことの意味を、深く考えさせられる感想文です。

ぼくの体内時計とすいみん

揖斐川町立小島小学校 六年

林 想真

「早くねる時刻は、おそい。だから父に、
「早くねなさい。」

と何度も言われる。それでもぼくは、ねに行かないので、最後にはし
かられて、あわててふとんに入る。どうして父はしかるのだろう。

「からだの中の時計」という本を読んだ。世界中の生き物は、体の
中に時計をもっているようだ。それを体内時計という。その体内時計
は、い伝するらしい。ぼくが早くねられないのは、父か母のい伝のせ
いかもしれないと思った。もし父のい伝だったら、「だれのせいでこん
なふうになったかと思ってるんだ。」とがっんと言ってやりたい。

それぞれの生き物に体内時計があるので、起きる時刻やねる時刻が
決まっているらしい。特に、ニワトリの例がすごい。ニワトリは、朝
鳴く鳥だけど、真つ暗な部屋に入れても、朝決まった時刻に鳴くのか
を実験した。ぼくは、朝になると日が出て鳴くタイムリングが分かるけ
ど、真つ暗な場所では、朝日が見えないので、ニワトリは鳴かないの
ではないかと予想した。しかしニワトリは、真つ暗で朝日が見えない
場所でも鳴いたそうだ。それは、日の出がなくても、体内時計が働い
て、鳴く時刻を知っているからだという。

ぼくにも体内時計があるのか、確かめることにした。いつもねてい
る部屋のシャッターをしめて、外からの光が入らないようにした。最
近は、六時に起きていたので、シャッターをしめても起きられると思
ったのに、起きられなかった。母に、

「ラジオ体そうにおくれるから起きなさい。」
と起こされた。確かに本には、「人間の体内時計は、二十五時間だ。」

と書いてあった。

ラジオ体そうのない日にもう一度やってみることにした。自然に目
が覚めた時刻は、七時五分だった。やっぱり、ぼくの体内時計も二十
五時間なのかもしれない。でも一日は、二十四時間だ。本によると、
太陽の光を感じることで、体内時計との一時間のズレを直している
という。学校がある日に、毎朝同じ時刻に起きるのは、太陽のおかげだ。
朝、太陽の光を浴びることは、大切なことだと分かった。

ぼくの父は、ぼくが早くねないとおこる。すいみん不足だと、勉強
や運動に集中できなかったり、すぐイライラしたりすると聞いたこと
がある。父もすいみん不足なのではないだろうか。よいすいみんをと
るために、大切なことを調べると、日中、太陽の光を浴びて運動した
り、ねる時は部屋を暗くしたりするとよいことが分かった。親のい伝
だからと早くねることをあきらめずに、部屋を暗くして、ぼくも父も
すいみんがとれるようにしたい。朝は太陽の光を浴びて、
健康な体で二十四時間を過ごしたい。



吉村 崇 作
「たくさんふしぎ からだの中の時計」
福音館書店

【講評】

本から得た体内時計の知識と自らの実生活を関連付けて書く
ことができています。自分で予想を立てたり、実際に体内時計が
働くかという実験を試みたりすることで、本を心から楽しんで
います。

中学校の部

特選 自由図書部門

命の尊さ

池田町立池田中学校 二年

竹中 咲綾

「優しくて力強い花」

この本の表紙を見た瞬間、花、葉、茎全てが優しく描かれている絵に私はとても心を惹かれ、思わず手に取りました。いつも私の家の本棚にあり、母がときどき読んでいる本でした。

この夏、私の祖父、母の父が亡くなりました。祖父はとても絵が上手でした。小さい頃は一緒に絵を描いたり、外で写生をしたり、楽しい時間を過ごしました。私は祖父の絵が大好きでした。母も祖父の優しい繊細なタッチが好きだったとよく話していました。そんな祖父の絵と似ている表紙の絵が印象的な「かぎりなくやさしい花々」というタイトルの本を読み進めていくと、ある事実が衝撃を受けました。

本の著者である星野富弘さんは体育の教師時代、体操の指導中に頸髄を損傷し、手足の自由を失ってしまいました。九年の長い苦

しい入院生活の中で、中学生から寄せ書きを頼まれたことがきっかけで、口に絵筆をくわえて詩や絵を描くようになったそうです。表紙の絵は、そんな苦しい中で描いたとは思えないとても力強い絵です。体が思うように動かないという絶望、恐怖の中で、人はこんなに強くなれるのでしょうか。星野さんのように私はたくましく生きることができのでしょうか。いろいろな思いがこみ上げてきました。もし自分が手足の自由を奪われ、大好きなクラリネットを吹くこともピアノを弾くこともできなくなったら、私は無気力のまま、天井を見つめる日々を送っていると思います。そして積極的に生きようとせずなんとなく生かされ、明日を迎えていると思います。

そんな弱い心をもっている私でしたが、星野さんの絶望から這い上がる強い気持ちと生前の祖父のリハビリに励む姿が重なり、自分の弱さを自覚しました。星野さんは首の力が弱っていたそうなので、口に絵筆をくわえるということは、並大抵の努力ではなかったと思います。きつと痛くて辛かったと思います。それでもあきらめず、自分に負けまいと挑戦し続けたのだと思います。

また、祖父も脳梗塞で寝たきりという重度の後遺症が残ると病院の先生から言われていましたが、前向きにリハビリに取り組み、車いす生活から伝い歩きまでできるようになりました。この奇跡的な回復に、担当の先生やリハビリの先生、看護師さんたちも驚き、私たち家族はとても喜びました。私は、星野さんと祖父が

ら強い生命力を感じました。自分も何事も精一杯努力し続ける人になりたい、誰かに生きる力、勇気を与えることができる人になりたいと思うようになりました。この本との出会いが、これからの自分を考え直すきっかけを与えてくれました。

そして、最後に一番心を動かされた言葉があります。

「神様が一度だけ、このうでをうごかしてくださるとしたら、母の肩をたたかせてもらおう」

という星野さんのお母さんへの言葉に涙が溢れました。星野さんは、お母さん、家族、病院の先生やスタッフ、たくさんの人たちに見守られ、支えられてきたのだと思います。中でもお母さんです。自分の体と向き合いながら、一番に支えてくれたお母さんへの感謝、温かい思いが伝わってきました。支えあう人と人との心の温かさを感じました。私も日々のささいなことでも家族や友達、支えてくれる人たちに感謝の気持ちをもてるように、そして言葉にして伝えることができる人でありたいです。

花は動かないけれど、美しく、限られている命を一生懸命に咲いています。生きている花々を星野さんは自分と重ねたのではないかと思いました。優しくかぎりあるときを生きる花々を描く星野さんから、人にとって大事なものの、人と人との温かい絆、そして何より生きるこの意味、命の尊さを考えさせられました。また、人はあきらめない心がとても大切だと思いました。ここまでしかできないと思いついてしまったたり、ここまでしかたどり着けないと限界を感じたり、

知らされていても人は誰も予想できない無限の可能性を持っているのではないかと思うのです。自分の可能性を信じ、「何としても成しとげたい」という気持ちで何事も目標に向かって努力していくことの大切さをこの本を通して教わりました。私も星野さんのように強く、花々のように優しく生きていきたいと思っています。

星野 富弘 作

『かぎりなくやさしい花々』 偕成社



【講評】

自分のことや思いがたくさん書けているのがすばらしいです。定型にとらわれることなく、自分を全面に出して書ける生徒が二〇二五年にもいるのだとうれしくなりました。

中学校の部

特選 課題図書部門

食べることに向き合う

揖斐川町立谷汲中学校 三年

植山 あおい

私は給食が好きだ。食べるのが好きだ。この前も、家族に、「学校で一番何が楽しい?」と聞かれたので、

「給食!」

と答え、笑われた。そんな私が、この本を読もうと思ったのは、「食べるのが下手」という言葉にひっかかったからだ。そもそも食べるのに上手も下手もあるのだろうか。そんな疑問を抱えて読み始めたが、読み終わると、今まではお腹がすいたから食べる、おいしいから食べるというように欲求から起こる何の抵抗もない行動として捉えていた「食べる」ということについて、真剣に考えている自分がいた。

葵は会食恐怖症、咲子は摂食障害で食べることに困っていた。つまり、これが「食べるのが下手」ということだった。葵は、咲子と話す中で、自分が会食恐怖症だということを知った。そして、葵は咲子の摂食障害についても知り、自分だけがづらい思いをし

ているのではないと分かった。私たちは、知らないだけで、悩みと共に生きている人は少なからず近くにいる。私もその一人だ。私は、友達と会話をするのが下手だ。友達何人かと一緒にいても、自分が話すタイミングを掴めず最後まで言葉を発せずに会話が終わってしまうことがよくある。ただ相槌を打つだけの私を、友達はどう思っているだろうと後悔するのだ。食べることについてあまり考えずに生きていきたいと思っていた葵が、咲子やラマワティと共に給食改革を目指していた。私は、葵たちの給食改革を応援したい気持ちはあるのだが、どこかそれを素直に応援できない自分もいた。それは、「給食は食べるもの」という考えが常に私の根底にあるからだった。葵が思い切って給食を残す場面では、やはり嫌だったし、葵たちが苦しい思いをしていることを理解していたはずなのに、わがままのように感じてしまうのだ。私には、給食に楽しい思い出やおいしくて幸せを感じる瞬間があって、給食がなくてはならないものになっている。何より栄養バランスを考えて作られている給食を否定するなんて考えられなかった。

しかし、栄養教諭の橘川先生は違った。「給食を食べてほしい」という願いはあるが、葵たちの思いを尊重していた。そこが私に欠けていた部分だ。栄養教諭としての専門的な知識を用いて丁寧に給食の良さを説き、だからといって葵たちに食べることを強要しなかった。橘川先生は「学校で野菜を栽培して給食に使えば、あなた方にもっと食に興味を持ってもらえるんじゃないか。」と、花壇にほうれん草を植えていた。生徒

たちのためにそんな工夫をする橘川先生の作り手としての思いやりが私にもひしひしと伝わってきた。葵たちに食べることと向き合う機会を与え、彼女たちが積極的に食べることについて考えるに至ったのは、橘川先生の受容の仕方のためだったと思う。私自身、食べることに対して自分だけの考えにとらわれていたが、他者の考えも尊重するという態度を学ぶことができた。



一人ではどうすることもできなかった葵。咲子やラマワティ、コツペがいて、橘川先生の助言があったから、葵は行動を起こすことができたのだと思う。だから、変化を求めたいと思うなら、一人で悩んで苦しい時を我慢して過ごすのではなく、心の内を誰かに聞いてもらうのも一つの方法だと知った。

知らない土地で迷子になり、大雨のため公民館に避難した時に、葵はお味噌汁を飲んでほっとする。その時の言葉が印象に残っている。「困難な状況にあって、それでもなんとか踏ん張るために、まずは、ものをたべる。みんなで分け合って食べる。それはたぶん、味とか栄養とかを超えた、何か特別な価値を持つ、営み。」私は、この言葉は、皆で同じものを食べること、一緒に頑張ろうという気持ちになり、それが人々に安心感を持たせるということだと捉えた。

「食べない」という言葉一つ見た時に、葵は「食べられない」から食べない、咲子やラマワティは「食べたくない」から食べない

いというように、人によってその意味合いが違っていった。「食べれない」の背景には、病気や家庭環境、宗教、文化、経済的事柄などがあることを私はあまり考えなかったが、これらの背景は、生きることに直結している。つまり「食べること」を考えると「生きること」を考えることなのだ。そう理解した時、橘川先生はおそらく、葵に食べることのハードルを下げるために「たかが食事」と言ったのだろうが、私は「されど食事」と思うのである。

葵の会食恐怖症は治っていないが、彼女は前に進もうとしている。私もどこかが不完全でどこかが不健康だ。成長期真っ只中にいる中学生の私だからこそ、食べることと真剣に向き合っていきたい。

天川 栄人 作

『わたしは食べるのが下手』 小峰書店

【講評】

主人公や登場人物に対して、自分の持ち合わせない感情や感覚と真剣に向き合い、自分の答えを出した言葉に生きる強さを感じました。

また、橘川先生の言葉を受け止め、そこから自分が思う言葉を添えるところが、ただ読み、言葉を鵜呑みにするのではなく、新たな考えを持つ深まりを感じました。

令和七年度 揖斐文読書感想文審査を終えて

揖斐郡読書感想文推進委員会

今年度は一一八一点の応募がありました。これらを自由図書部門・課題図書部門に分けて学年部ごとに慎重し審査し、特選、入選、佳作を決定しました。

優れた感想文に共通していたのは、選んだ本をじっくりと読み、作品の主題を捉え、自身の生活経験と関わらせながら感想を書いていたことでした。また、社会問題に目を向け、自身の願いや目指す姿などをもち、自身の生活をよりよいものにしようと、自己の成長につなげている感想文も多くありました。

審査をしていく中で気付いた点をいくつかまとめました。参考にしていただけたら幸いです。

(◇…よい点 ◆…改善点を表しています。)

【低学年の部】

- ◇登場人物の気持ちに共感し、「自分だったら…」と自分の考えをもつことができていた。
- ◇自分の願いや目指したい姿など、自身の生活へ落とし込んでまとめられていた。
- ◆段落などの文章構成の工夫ができるとよい。
- ◆あらすじばかりにならないようにしたい。

【中学年の部】

- ◇中学年らしい表現で書くことができていた。
- ◇基本的な文章の書き方ができているものが多かった。
- ◇書き出しが工夫されているものが多かった。
- ◆自分の生活体験と結び付ける部分があるとよい。

【高学年の部】

- ◇自分の体験と本の内容を結び付けてかけているものが多く、文章の構成もバランスよく書くことができていた。
- ◇本を読んで感動したことを感想文に落とし込めていた。
- ◆自分の体験ばかり書いてしまい、本の内容に触れていないものも見られた。
- ◆途中で内容がずれるものもあり、書く前に構想を練るとよい。

【中学校の部】

- ◇定型にとらわれることなく、自分を前面に出して書いているものがあつた。
 - ◇自分のことや思いを深く書くことができていた。
 - ◆誤字脱字があるものや、原稿用紙の正しい書き方ができていないものがあつた。
- 今年度もたいへん多くの応募をいただき、ありがとうございます。今度も、素晴らしい作品が一層増えることを願っております。